

伊太利とこころ

(二五)

瀧川 規 一

【フ市に於ける詩人ブラウニングの愛の集】

伊太利藝術の泉源フロレンス市に於けるダンテ對ベアツリスの戀愛關係に就いては概括的に云ひ盡した積りである。詳細論に至つては無盡藏であつて一々其を述べる必要がない。ダンテ研究の書目を列舉する丈けでも煩に耐えない程である。ダンテ對ベアツリスの戀愛は空想的であると見れば空想的であり現實であると見れば現實的な戀である。見様によつて如何様にも解釋される。ダンテ自身は故郷のフロレンスを放逐された後も猶人妻に理想の戀を續けてゐた。然るに本題のブラウニング夫妻の戀はダンテの戀とは全く反對であつて、愛し合つた兩人が故郷の英國を去つてフロレンスに愛の巢を現實に造つたのである。この話は世間によく知れ亘つて

ゐる話ではあるが、フロレンス市そのものが餘りに興味に充滿せるが爲めに市を訪れてもカサ・ギヂ(Casa Guidi)の愛の集を見逃がし易い。家の表壁には白い大理石の扁石に伊英兩國を繋ぎ合はせた女詩人の家と云ふ意味を刻し夫人の詩句を壁に連ねてゐる。

兩人の戀愛の成果から見て讃辭を措まぬ人は、十九世紀の初期に二つの家庭に成人した二人の小供は後に英國の思想界文學界に不滅の印象を遺し現實生活に最完全なる牧歌戀愛の典型を示したと云ふ。斯く讚美されるその小供の一人は後のブラウニング夫人で幼名をエリザベス・バレット(Elizabeth Barrett)と云つた。小娘のエリザベス・バレット嬢は元氣に充ち満ちたしつかり者で頭腦のよい利潑な性質であつた。目

がばつちり大きく黒眸で身體は細いが黒髪のカールを垂らして如何にも小娘らしい小娘であつた。家は英國西岸のブリストル海峡に面しグロスタ(Gloucester)市から程遠からぬ連丘地帯にあるモールヴオーン・ヒルズ(Malvern Hills)と云ふ田舎のホープ・エンド(Hope End)にあつてこの地は空氣清淨な保養地に適してゐる土地である。エリザベスには八人の兄弟三人の姉妹があつた。後世に詩名を垂れた他の一人の小供は詩人ロバート・ブラウニング(Robert Browning)その人である。エリザベスよりは六歳歳下であつて倫敦郊外のカムバウエル(Camberwell)の静かな家庭で一人の妹と共に兩親の許に育つた碧眼、金髪の男兒で、稍せつかちな熱血的な性質であつた。

バレット嬢は八歳にならぬ以前から詩を書いた。父親は頑固な人であつたが娘の才能を見て娘の欲するままに詩作を奨励した。十七八世紀に跨る詩人ポープ(Pope)が翻譯したホーマを讀んでからは希臘人を神様のやうに思つて理想

化し希臘軍の指揮者アガメノン(Agamemnon)のことを夢想した。小娘の作詩集「マランの戦」(The Battle of Marathon)の刊行に父親は許した。ホープ・エンドの静かな田舎生活では讀書以外に利潑な小娘を満足さすものがなかつた。彼女は手當り次第に良い本も悪い本も讀んだ。この頃に有名な盲目の希臘學者ヒュステアト・ボイド(Hugh Stuart Boyd)と云ふ人が程遠からぬ田舎の都會グレート・モールヴオーン(Great Malvern)に来てゐた。この盲目の學者と希臘渴仰の娘とは親しくなり得る機會が自ら出來た。エリザベスの家庭は吾々から考へて裕福な家庭であつた。兄弟のエドワード(Edward)には蘇國人の家庭教師をつけて希臘拉典の古典文學を學ばしめ、バレット嬢には女教師をつけてゐた。この點から見て娘には富家であり勝ちな氣儘があつたことを察しられる兄弟のエドワードはエリザベスのことを常にベー(Ba)と呼んでゐた。このベーは一八〇六年に生れてゐる。嬢が二十歳に達した一八二六

年には無名で詩集を出してゐる。何不足なく見た家庭に不幸の風が吹き始める。二年後には最愛の母が逝く。父親がジャマイカ (Jamaica) に持つてゐた土地を奴隸制度の廢止の爲めに失ひ、その他訴訟事件續發の爲めに家産が傾いたホープ・エンドの家は人手に渡り遂に一八三六年には倫敦のグロスタ・プレス (Gloucester Place) の七四番に轉住することになった。その間にもバレット嬢はエースキラス (Æschylus) のプロメシアス・バウンド (Prometheus Bound) の翻譯を公にしてゐる。倫敦に移つてからは親戚のジョン・ケニオン (John Kenyon) の紹介によつて嬢はミットフォード (Mitford) 嬢をはじめ多くの文士連と知合になり作詩によつて主要なる文學雜誌と接近することが出来た。吾々から見ればバレット嬢はこの時既に三十歳を超えた嫗櫻であるが、ミットフォードのこの時の印象では未だ娘らしさに溢れてゐる。ペーは弱々しい身體をしてゐたが若々しくつゞまやかな娘らしい様子をなし、黒い眸と黒い毛と黒髪の房々

伊太利とくらぐ

せるカールと丸顔で賢さうな額とをもつてゐたと云つてゐる。この頃から肺患が始まり病身者となつたが詩作に熱中して諸種の雜誌に寄稿した。一八三八年にはウイムポール・ストリート (Wimpole Street) に一家が引越した。この年に彼女の最良の叙情詩だと見做されてゐる詩集が公にされたが、病勢益々募りトキー (Tortoise) の海濱療養地に行つて保養する必要に迫られた。二冬も其處に滞留してゐたが常に床に就いたのみで只數ヶ月の間ベッドからソファに搬び移された丈けであつた。その間も元氣は衰へず詩作を雜誌に發表してゐた。附添への爲めに兄弟のエドワードがエリザベスにお伴をした。然るに或る夏の日にエドワードは友人等と共にヨットを走らしたが轉覆して死歿したこの悲しき事件が病める心を酷く痛めたことは申す迄もない。彼女の死後公にされた詩にその時の感じを歌つてゐる。やがて病車に載せられ除行の旅を續けて倫敦の家に歸り薄暗い部屋に病身者として日を送つた。作詩の發表が重なる

につれて女流詩人としての名聲が高まつて來たエリザベスの未だ嘗つて一度も會談したことのないホーン(Horne)と云ふ男と現代文學に關する論説集を公にした。この論説集にある各論評のモットはエリザベスとブラウニングとが多く供給した。然しこの兩人は未だ一面識もなかつた。

一八四四年の夏にエリザベスの二卷の詩集が公にされた。世間は一時に賞讃の爆聲を上げた彼女は一躍して當代第一位の女流詩人となつた家の周圍には賞嘆の聲が轟き亘つて居ても彼女は靜かに薄暗い病室に身を横へてゐるのみである。これより五年以前ケニオンが或る料亭で晚餐をとつてゐた時或る人が同氏にそこに居合はせた瘠せ形の色の黒い顔立のよい青年を指してあれがバラセルサス(Paracelsus)の作者ブラウニングであると教へた。ケニオンは早速青年詩人と呼び、青年の父親はロバトと云ひ某學校に行つてゐなかつたかと聞いた。ブラウニングは家に歸り、ジョン・ケニオンと云ふ舊同窓を

覺えてゐるか父に問ふ。父親は早速記憶を辿つてジョン坊の似顔を描いてブラウニングに渡した。これでブラウニングは前晚の知合が父の舊同窓なることを認めた。斯くてケニオン及びブラウニングの父は舊交を溫めた。兩人が實際を重ねてゐる間にケニオンはエリザベスのことを話題に度々のせる。彼女の最近の詩集が出ることをバラセルサスの著者に贈る。詩集が到着した時は若きブラウニングは外國旅行で不在であつたが妹が其を讀んで先づ感心し、歸宅した兄の注意を惹き兄も亦これを讀んで嘆賞し早速讃辭を女流詩人に送つた。この手紙こそ兩詩人間に交はされた愛の書簡集の第一頁を飾るものであつて牧歌的求婚の芳香を世にはじめて傳へたものであるとされてゐる。手紙の日附は一八四五年一月の十日である。この頃の戰時用語を借りて云へば戀愛の火蓋がはじめて切つて落されたのである。

他の一方の詩人ロバト・ブラウニングは一八一二年の生れであり父は英蘭銀行に奉職してゐ

た信用ある銀行員であり古書と畫繪に興味をもつて居つた。母は獨乙人の船長と蘇國女との間に生れた人であり、全く蘇格蘭婦人の典型であつたと云はれてゐる。小供のロバトは未だ幼き頭がマホガニの卓子に届かぬうちから詩を作るのが好きであつた。また學校に送られた時はその慧智によつて他の子供等の母親達に反對された程であつた。彼は十二歳ならずして詩集が出来上つた。十四歳まで學校にあつたが、學校が嫌になつたので父親は止むを得ずロバトを家に留め家庭教師に就かしめた。家庭にあつてロバトは無暗に本を讀んだ。最初に悦んで讀んだのはバレット嬢と同じくポープの譯のホームであつた。バイロン(Byron)の詩も亦彼の嘆賞する處となりやがてはシェリ(Shelley)の詩を愛し當時餘り認められて居なかつたキイツ(Keats)の詩をも讀んだ。シェリの詩の影響を受けロバトは一時に公然無神論者となり甚しきは二年間菜食主義の實行さへなした。然し菜食では視力が衰へることを經驗して再び常食に歸つた。少

年期から青年期に移る間は精神の動搖を來たし常に優しき母の心を痛めさせた。十八歳に至つて倫敦大學の希臘文學を暫時聽講したがこの頃はじめて詩人として世に立つ決心をなした。その素質を作る目的で彼はジョンソンの辭書を全部讀通したと云はれてゐる二十一歳頃には以前の無神論的信念が消え失せて神の信仰に立ち戻つてゐた。斯くて彼は最初の詩集ポーライン(Pauline)が一八三三年に伯母の出資によつて公刊された。これは餘り人氣がなかつた。彼はその年から翌年にかけて露國總領事に隨伴して露國を旅行した。歸つて波斯駐在の外交官たらんと欲したが目的を達せず再び詩作に歸り雜誌に寄稿した。一八三五年に問題のバラセルサスが公にされる。ロバトの幼時の詩集を讀んで既に將來の希望の光を認めて呉れてゐたユニテリアン派の僧がその評論を雜誌に送つて世の注意を喚起した。この詩集の公刊によつて青年詩人ロバトは當時の文壇の注意を惹き以前よりは世間が廣くなつた。俳優のマクレディ(Macrea-

ty)と知り彼の詩の評家フォルスタ (Forster) と知合となつたのはこの作詩公刊の結果であり料亭の晩餐會には詩人ワーヅワース (Wordsworth) 及びランダ (Lander) とはじめて會見しワヅワースは英國の最も若き詩人ロバート・ブラウニングと云つてトリストに答辭を述べた。若き詩人にとつては永久忘る可からざる光榮である。その時臨席したマクレディはブラウニングに脚本を作ることを奨めた。その後ブラウニングの脚本はマクレディによつて上演されたが餘り成功しなかつた。この時ブラウニングの家はキヤムバウエル (Camberwell) からハッチャム (Hatcham) に引起してゐる。一八三八年には伊太利旅行を企てツリエステ (Trieste) からヴェニスに行つた。アソロ (Asolo) が非常に氣に入つた。この行程の間に各地の印象によつて作つた詩を發表し其の他種々の叙情詩を公にし脚本も作つたが結局舞臺は自己に適しないことを自覺した。また知人を援助する爲めの雜誌に詩を寄稿した。伊太利が非常に氣に入つたと見え一

八四四年には再び旅行をしてゐる。この旅行から歸つてはじめてバレット嬢の詩集を讀んだのである。この詩集に感心した青年詩人は早速女流詩人を訪問したと申し出たが絶對安靜を必要とすると云ふ理由で許可されなかつた。然しながら若き青年詩人は一回や二回の拒絶では斷念しなかつた。遂に目的を達して一八四五年五月二十一日火曜日に兩詩人が直接會見することを許された。この時直に兩詩人の運命が定つたと云へばそれまでであるが、青年詩人の方ではそれを自覺してゐてもそれを相手の女流詩人に説得するには長時間を要した。益瘦れ姿の病身者で神經過敏になつてゐる女性を捕へて、身體に不思議に耐久力のあるのは死の魔力にあらずして愛の力なりと信じさせるのは骨の折れたことであらう。この求婚期間に彼等兩人は牧歌的眞情を吐露した。以後後世に無比の文學を二回遺したのである。第一回はこの求婚期間に公にされたバレット嬢の「葡萄牙人からの小歌集」

(Sonnets from the Portuguese) であり第二

回は詩人の死後發表された交換書簡集 (Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett)

である。兩詩人の求婚は純情牧歌的ではあるが現實生活の見地から考へると種々の故障が伏在した。第一に女の病弱狀態が果して結婚を許すや否やの懸念があつた。父は頑固爺でなくとも親心としてそんな時の結婚を許しさうにもないバレット氏は果して許さなかつた。病人は新らしき興奮の許に病勢が衰へた。醫師は溫き外國に冬を過ぐすやうに奨めたが父はこれをさへ許さなかつた。ブラウニングは公然女の父親に結婚許可を願出やうと計つたが、バレット嬢は類似の場合父親が妹に叱つたと全様の叱をうけては自分の生命が縮まる。それよりも後に父の赦免を得ることにして先づ結婚をしようと云ひ出した。兩人は秘密手段を斷行することに決めた。兩詩人は絶對秘密裡にマリルボーン教會 (Marlybone Church) で結婚式を舉げた。今日ではリーゼント・パーク (Regent Park) 附近にあるこの教會の門に兩詩人結婚の場所なることを掲

示して訪客の注意を惹いてゐる。これ實に一八四六年九月十二日であり女詩人の年齢は四十歳男詩人の年齢は三十四歳である。妙齡の若人とも云ひ兼ねる兩人のロマンスである。舉式後バレット嬢は何喰はぬ顔をして教會から父の家に歸る。一週間後に嬢は一家が晩饗をとつてゐる間に女中と愛犬とを伴れて家を出でヴォクソール (Vauxhall) でブラウニングに會しその晩はハーブル (Havre) に向つて乗船出帆した。やがて伊太利の地に入るや第一にピサに至り兩詩人は一八四六年の冬から翌年にかけて其處に滞留した。全年の四月に目的のフロレンスに落着きカサ・ギヂに本題の愛の巢を造つたのである。病身者の詩人の健康は豫期に反し驚く程回復した。溫い日の光を身心共にうけた結果であらうと人は云ふ。カサ・ギヂの家では兩詩人の生活は何等生活を亂すやうな事件もなく幸福なる日が續いた。幸福なる生活の所産として兩詩人中の何れかの手から詩は續々作られる。夫君のブラウニングは初めて自費出版でない詩集を翌年

に公にする。その翌年には長男が生れる。然しこの幸福なる生活に陰暗の影がさした。ブラウニングの母親の訃音を聞いてロバートは悲嘆の極に沈んだ。妻君に云はせると「平常は良人は妾の身の健康と小供とに夢中の悦を感じてゐたやうであるが、この時の悲はその反動として恐ろしい程であつた」と云つてゐる。その年の夏に夫妻等は英國に歸らうと思つたが、ブラウニングにはそれが耐えられなかつた。母親の歿で毎日刈り揃えられて屏に生え茂つてゐる薔薇を見るに忍びないとブラウニングは云つた。その後夏を二度越すまでは故郷のことを想ふと母親の顔が眼前に彷彿としてゐたと云つてゐる程に詩人は母を愛してゐた。やがて詩人は母の抱いてゐた信仰を哲學的な詩に表はした無聲の碑を母の爲めに文學の世界に建立したのである。妻君は「荷人の小歌集」の續篇を公にする一八五〇年の四月に桂冠詩人であつたワーズワースが逝く。この時或る文學雜誌は桂冠詩人の榮位は女皇治世中に於て女性によつて占められた文學上

の位置を認め若き女皇に敬意を拂ふ意味にてブラウニング夫人に授けらるべきものであるとさへ云つた。一八五一年の夏に兩詩人は英國に歸つた。ブラウニング夫人は父に怒を融き接吻をして貰ひたいと頼んだが、父の怒は融けず手紙の返事をさへして呉れなかつた。これは夫人にとつて想の外の悲の種となつた。ブラウニングはこの時の歸國にも次の歸國にも歸ると必ずマリルボーンの教會の戸口に行き自分等の幸福なる生活の發祥地である敷石に接吻した。砂を噛む思がしただらうと聞くのは愚問である。翌年の冬夫妻はカーライル(Carlisle)と共に巴里に行つた。ブラウニングはシェリ論を書き夫人は、「カサ・ギヂの窓」と題して伊太利の自由の爲めに切望を述べた。この頃には夫人は神靈派の透視術などに惑つてゐたがやがて惑が解け術者との關係を絶つた。一八五三年にはブラウニングの脚本が倫敦で舞臺上の成功を見、その年の夏にはルッカ(Lucca)の温泉に遊び翌年まで夫妻は羅馬に過した。一八五五年には倫敦に歸つ

て居りその年の冬から翌年の初には巴里に居り十月には伊太利に歸り翌夏にはルツカの温泉に再度滞在し一八五七年の冬より翌年にかけてフロレンスに歸つてゐる。この間に夫人も幾多の作品を公にしてゐた。一八五九年には夏をシエナ(Siena)に過し冬を羅馬に送り翌年の冬には矢張り羅馬にあつたが、妹の死を聞いて落膽し自らは病身者に逆戻りをなした。斯くて一五六一年の夏の初にフロレンスに歸つた。その年の六月に伊國の大政治家カヴール(Cavour)の死を聞いて大に落膽した後間もなく夫人の病勢は頓に悪くなつた。最初は氣管枝炎が再發したのだと思つてゐたが醫者は肺に重大なる症狀があると診斷した。然し六月廿八日の夜にはさまで切迫してゐると思はれなかつた。家族は看護の番人を病床につけて夫々床に就いたが、翌朝午前四時半に最後の時が來た。夫人は享年五十三。七月一日にはフロレンスの新教徒の墓地に葬られた。臨終の近づくやブラウニングは妻の病床の傍にあつたが兩人は死の近づく感じは少

しもせず心をなやまさなかつた。この時刻々死に近づく夫人の心は愛と喜悅とに充ち歡喜の表情があつたのみであつた。良人の言によるとその時の妻君の表情は良人に對して抱く愛の最完全なる表情であつて、いつもにこ／＼してうれしうな顔であつた。この様子が數分間續いた彼女は頭を良人の頸の上にもたせ良人の腕に抱かれて息をひきとつた」と云ふ。ブラウニングが夫人に向つてどんな氣分がするかと訊ねると只一言「美しい」と答へたのみであつた。永別の悲は斯くて兩人は少しも感じなかつた。夫君は妻の永眠の場所に白い大理石の墓碑を建てた妻の死と共にブラウニングは母無し子を伴つて直にフロレンスを去り故國に歸つた。

カサ・ギヂは六室があり何れの室も美しいが就中三室は特に宮殿の如くに美しくあつた。臺所があり前方には臺地に面しサン・フェリチェ(San Felice)の寺の壁に面してゐる。とは夫人自らの言である。米國の彫刻家で兩詩人の友人であつた人の言によると、四角形な控室には

大きな繪が壁に掛つて居りピアノが据えつけられてゐた。小さい食堂には織物の壁布が張りつけられテニスン・カーライル兩文豪の圓形浮彫の像がブラウニング自身の像と共に壁にかかつて居た。塑像及び習作を置き飾られてある長い部屋はブラウニング専用の部屋であり、大きな居間は夫人が常に居つた部屋である。室内の光線は壁掛けと木彫の額の昔の聖人等の像とによつて柔げられた。戸口近くには長い安樂椅子があり小卓には書籍新聞その他執筆の材料が載せられてあつた。同彫刻家の印象では夫人を知ることとは夫人を愛することであると思へる程に夫人は不思議に魅力をもつてゐた。美人の容貌とは云へないが表情に氣高い美があつたと云ふ。

米國の作家ホーソン (Hawthorne) 夫妻はカサ・ギヂの一夜を述べてブラウニング自身に見受けられる明敏なる頭と常識的な話振りと熱心と眞面目とを述べてゐる。以上述ぶる處によつて明なるが如くカサ・ギヂの家に於ける兩詩人の愛の巢は殊に夫人が生前持つてゐた伊太利

愛によつて永久に記念さるべきものである。

新刊即報

○比 叡 山

昭和七年二月發行 (非賣品)
井上敬道編

京都の精華高等女學校で郷土教育の材料として本書を編成された、四六版三一九頁の冊子で、地圖や挿圖が多い、目次をみると歴史篇、地理生物篇、文學篇の三部から成立ち比叡山と京都との關係、佛教の中央根本道場としての延暦寺、それから僧侶と武家さういつた歴史の外に、地質構造、氣象をのべ叡山植物をはじめ、叡山小鳥、溪流動物、泡吹虫、石跳虫、陸産貝等珍らしい動物が文學的に詳述されてゐる。井上君が博物の先生であつて特に文學に興味のふかい人であるだけに、文學的趣味の豊かな本になつた、猶文最後に叡山について古の文學者、明治から現代へかけての文學者の巨篇小什を集めてあるのもかうした郷土志としてよい思ひつきである。土地の好學者が、自らの郷土を天下に紹介するものゝ上乘なものとして本書の發刊を祝する(藤田)

○萬集地理考

豊田八十代著 大岡山書店
定價三圓八十錢

本書は萬葉集に現はれてゐる地名のすべてについて、その所在と説明とを加へたもので四六版三七四頁に達する。附録